

も好ましい状況ではなく、当時の会長、山岸は生理学・形態学など広い学問分野を含んでの鳥学の発展を呼びかけている（鳥学ニュース 50, 65号）。

この時期、1年に4号が発行されるスタイルが定着し、年平均14.6編の論文が収録された。

和英分離前夜から和文誌の時代〔47巻、1998年（平成10年）～60巻、2011年（平成23年）〕

2002年の51巻から、日本鳥学会誌は英文誌と別れ和文誌として独立した。さかのぼると、1998年学会誌改革検討グループが作られ、学会誌和英分離の検討が始められた。これは国際誌に英文論文を発表する研究者が増えたこと、その一方で英文論文が多く載る鳥学会誌が和文論文発表の場として敬遠されたことから、投稿論文が少なくなったことが原因であった（鳥学ニュース71号）。分離後の和文誌に求められたのは、研究成果を自国語で発表する場であることとともに、執筆を依頼してでもよい総説を載せること、記録的価値のある観察の記録を積極的に掲載することであった。これを受けて1999年、「投稿の手引き」が改定され技術報告、観察記録という新しいカテゴリーの論文を掲載することとなった。また、大会シンポジウムなどを材料とした、主として総説論文からなる特集を組むようになった。

このような特集に加え積極的な投稿もあり、近年の和文誌には総説が多く掲載されている。また、観察記録に寄せられる新分布情報も多い。2008～10年の掲載論文は総説5、原著16、短報18、観察記録21であった。和英分離の原因となった投稿不

足の状態は概ね脱したと言える。この期間を通じても年平均20.1編の論文が掲載されており、学会員の高いアクティビティを示している。

論文の内容を見ると、相変わらず生態・行動に関する論文や新分布の記録が多いが、分子系統学や生理学に関する論文も時に発表されるようになってきた。また、DNA分析はもとより安定同位体解析、バイオロギングなど新技术を用いた研究が発表されるのも近年の傾向である。「鳥類学におけるDNA研究」（1999, 48巻1号）、「バイオロギングによる鳥類研究」（2010, 59巻1号）といった特集にもその流れを見ることができる。そして、保全に関する論文が増えたのも顕著な傾向である。「カワウの基礎研究と応用研究」（2002, 51巻1号）、「野生生物の保全に挑む行動学」（2003, 52巻2号）などの特集以外にも、鳥への人為の影響やモニタリング・保全の方策に関わる多くの論文が掲載されている。

最後に、掲載論文の価値を高めた二つのできごとに触れておきたい。一つは総目次集（2002, 90周年記念・特別号）の出版である。この労作がなければ、昔の論文に何が書かれていたのかは、多くの会員にとってほとんどわからず仕舞いとなっただろう。二つ目は論文のweb上での公開である。2007～09年にかけて、独立行政法人科学技術振興機構（JST）のJournal@rchiveとJ-stageに学会誌に掲載されたすべての論文が搭載され、容易に読むことができるようになった。これらが活用され、過去の論文が今後の研究に活かされることを願う。

学会誌の体裁と内容の変遷

鶴見みや古（山階鳥類研究所自然誌研究室）・中村 司（山梨大学名誉教授）

日本鳥学会誌「鳥」は1915年（大正4年）5月26日に創刊された。編集人は内田清之助である。「鳥」創刊について永澤六郎（1915）は、動物学雑誌の中で、「（前略）申す迄もなく、日本人の鳥学は芽を出したるばかりのものなり。これを欧州の鳥学の5-6世紀も以前より、所謂同好者の多数を有すると比較にならず。されば此雑誌の如きも思切って通俗的の、純素人的のものとなすか、それとも同好者相手のものとなすか、又は全然甘味を取去りたる、純玄人の機関雑誌となすかに就ては、

吾人は多大の興味を懸けざる可からざりしなり。而も今や其注目せる雑誌を手にし、其表紙に三色刷石版を用ゐ、本文にカットを挿入し、科学雑誌の簡朴を失わざる程度に、気の利いたる装飾の施されたるを見るに及んで、吾等は其狙ひ所の勿論通俗を旨とするものにあらず、さりとして純学者的のものにあらずして、寧ろ同好者本位のものなるを知るを得たり。（中略）余りに調子を低めて、是、商品のみとの譏（そしり）を招かんも口惜しかるべきが、さりとして、一足飛びに、西洋の鳥学

雑誌の真似をなし、是、物なり、されど印刷物にして読物にあらずとの批評を蒙らんも、迂遠に過ぐべしとしんずればなり。(後略)」と記しているが、西洋式の科学様式が日本に紹介されてから50年ほどの時代にあつて、鳥を対象とした学術雑誌をどのように発行したらよいか、暗中模索の中で「鳥」のスタートが切られた様子が伺える。その後、「鳥」は太平洋戦争の影響で1944年9月(第11巻通巻第55号)の刊行をもって1947年12月の復刊まで約3年間休刊となるが、創刊号から現在までの鳥学会誌の発行冊数は214冊、論文数は、和文1267編、英文430編、独文1編を数える^{注1}。

創刊から戦争による休刊まで〔第1巻、1915年(大正4年)～11巻、1944年(昭和19年)〕

この30年間に50冊(合併号5冊を含む)が発行されている。この時代の本の大きさは第10巻までは菊判変型、第11巻からはA5判で、綴じは第1巻から第6巻(通巻第1号から第30号)までは右綴じで、論説、講話が一段組み、雑纂、雑報などは2段組みとなっている。文章は縦書き旧漢字、旧仮名遣い、第7巻からは左綴じ一段組み、文章は横書き旧漢字、旧仮名遣いである。表紙のデザインは、通巻第1号から第8号までは植物や鳳凰など鳥をモチーフとしたデザインでカラー印刷、縦書きの題字「鳥」の文字と号数、その下に右横書きで発行年月日と「日本鳥學會」と記されている(写真1)。第2巻(通巻第9号)から第10巻(通巻第50号)までは、文字の体裁は変わらないが、デザイン画に代わり、モノクロの鳥の生態写真が用いられている。そして、第11巻(通巻51-52号)からは文字のみのシンプルな表紙となる。なお、この時期は、多くの号に口絵として小林重三のカラーの画や写真数ページが入り、最も薄いもので20ページ、厚いもので311ページ、平均約110ページで構成されている。文字表記については、第1巻のみ各論文のタイトルは「ゑぞむしくひノ新産地ニ就テ」の様に旧仮名遣いで鳥の和名はひらがなであるが、2巻(大正7年)からは第1巻同様旧漢字、旧仮名遣いではあるが、鳥の和名は現代と同じくカタカナ表記となる。さらに、第2巻第8号からは、裏ページに“Tori” THE AVESと英文タイトルと英文の目次、英文の書誌事項が加わる。誌面の構成は号によって若干の違いはあるものの、口絵、論説、講話、雑纂、雑報、質疑応答、会則、投稿規定等で組まれているが、



写真1. 表紙のデザイン。第1, 2号に植物、第5, 6, 8号に鳳凰と思われる鳥がそれぞれ使用されている。

時に「余白埋め」として、「鳥と飛行機が競争したら」(通巻第21号(1926))、「鳩のかほりにコウノトリを傳書通信に使ふ」(通巻第48号(1939))、「〇〇年度ツバメ渡来期」といったおもに各地の新聞に掲載された鳥に関する記事を載せているのが面白い。なお、この時代の特徴のひとつに、著者の肩書き表記がある。たとえば、「理学士 黒田長禮」、「子爵 松平頼孝」、号によっては「理学博士 侯爵 黒田長禮」などと記されている。これは和文目次および本文の著者の先頭にみられ、裏表紙の英文目次には記されていない。なお、当然のことだが、肩書き表記がなく、姓名のみの著者も存在する。この肩書き表記については、当時の生物研究者にはいわゆる殿様、貴族が多かったことに由来するのかもしれないが、時代を反映するものとして興味深い。この期間において、第7巻(通巻第33/34号)を本会創立第二十周年記念号、第9巻(通巻第45号)を本会創立第二十五周年記念号、第11巻(通巻第53/54号)を本会創立第三十周年記念号、として各表紙に印字しているが、雑誌中に記念号としての特別な企画は組まれている。会誌はこの後、太平洋戦争の影響により第11巻(通巻第55号、1944年9月)をもって休刊となる。

復刊から60周年まで〔12巻、1947年(昭和22年)～21巻、1972年(昭和47年)〕

この26年間に35冊(合併号2冊を含む)が発行されている。この時期を象徴するもののひとつとして紙質がある。創刊以来会誌には上質紙が使われてきたが、太平洋戦争後に復刊された第12巻(通巻第56号)から第13巻(通巻第61号)までに発行された会誌にはザラ紙またはわら半紙状の

茶色い紙が使われ、戦後の物資が不足していた中での発行されたことが窺われる。本の大きさは第12巻から第19巻まではA5判で、第20巻からはB5判となる。綴じと段組みは共通して左綴じ一段組み、文章は横書きで、第16巻(1961年)までは旧漢字、旧仮名遣いだが、第17巻からはほぼ新漢字、現代仮名遣いとなる。そして、第20巻(通巻第88号)からは、「従来の会誌は小型で白い表紙という点で見劣りがする」という体裁上の問題と、判を大きくすると、図版、図表、写真などの大型の物も掲載できるという理由から大型(B5判:173×248mm)になり、表紙の色は白から緑色となる(編集者1970)。段組みは第12巻から第20巻までは1段組みだが、第21巻からは2段組みとなる。この時期の各号のボリュームは、最も薄いもので42ページ、厚いもので262ページ、平均約78ページで構成されている。表紙については、第12巻(通巻第57号)から表紙の絵がコシジロヤマドリに固定される(写真2)。本種を採用した理由のひとつとして、高島春雄(1948)は、「コシジロヤマドリは最も鮮美であり、其の亜種名に本会初代会頭にして日本鳥学の進歩と普及に盡瘁(ジンスイ)された飯島魁博士の御名を帯び本誌の表紙を飾るにふさわしきものと考え」と記している。なお、表紙の画は、通巻第57号から70号までは当時庶務幹事であった黒田長久が描いているが、通巻第71号からは、原版の劣化により鳥類画家小林重三のものとなる。各号の誌面の構成は、第12巻(通巻第56号)は復刊第1号であることから、会頭の復刊の辞と戦後処理で来日していたGHQ天然資源局野外生物科長で鳥類学者



写真2. 1948年(昭和23年)第12巻(第57号)表紙。コシジロヤマドリ(黒田長久画)。画家の変更はあるものの、この号から第34巻(1986年)まで、表紙の絵はコシジロヤマドリに固定される。

でもあったO.L.オースチン博士の『「鳥」の復刊に際して』の辞はあるものの体裁はほぼ戦前のスタイルを踏襲している。そのほかは号によって多少の違いはあるが、口絵、論説、短報、講話、海外だより、保護、紙碑、内外の新著紹介(単行本、雑誌)、雑報、鳥ニュース、会合記録、会則、投稿規則、会員名簿で構成されている。特集号としては、第12巻(通巻第59号)が黒田長禮博士記念号、第13巻(通巻第63号)が故蜂須賀正氏博士追悼号^{註2}、第15巻(通巻第73号)が鷹司信輔博士追悼号、第17巻(通巻第79・80合併号)が創立50周年記念号、第21巻(通巻第91・92合併号)が日本鳥学会創立60周年記念特集号としてそれぞれ組まれている。

「鳥」から日本鳥学会誌へ〔22巻、1973年(昭和48年)～46巻、1998(平成10年)〕

この26年間に75冊(合併号17冊を含む)が発行されている。この時期の本の大きさはB5判、左綴じ、文章は横書き、現代仮名遣いである。段組みは第22巻から第25巻までは2段組みであるが、第26巻からは以前の体裁と同じ一段組みとなる。表紙は第22-23巻(1973-1975年)までは緑色で、題字「鳥」の文字と巻号数、右横書きで発行年月日と「日本鳥学会」と記され、上部に小林重三によるコシジロヤマドリが描かれている。この後、第26巻から第34巻(1977-1985年)までは、判のサイズは変わらないが、表紙が灰色になり、巻号表記が「TORI VOL. 26 NO. 1 June 1977」のように英語表記となり、題字「鳥」に加え、その下に「日本鳥学会誌」の文字が加わる。通巻表記も第100号(第25巻)をもって廃止される。刊行頻度は第26巻(1977年)から第36巻(1987年)までは年4号を3回(第2号と第3号は合併号)に分けて刊行、その後、第37巻(1988年)から第40巻までは年4回、第41巻(1993年)から第43巻(1994年)までは年3回(第3号と第4号は合併号)、第44巻(1995年)から第46巻(1997年)までは年4回刊行されている。また表紙絵は、第26巻(1977年)から第34巻(1986年)までが黒田長久博士によるほろ打ちをするコシジロヤマドリとなる。本文の段組もそれまでの2段組みから1段組に変わる。この時期のボリュームは最も薄いもので22ページ、厚いもので130ページ、平均約55ページである。この時期の特徴の一つは合併号が多いことであるが、この理由は財政難であるという記述がこの時期の前半に発行された号の編集

後記に見ることができる。誌面は論説、論文、短報、雑報、特別記事、特別寄稿、新著紹介、会記、時報、ニュース、などで構成されている。なお、この時期の特筆事項としては、和名の統一を目的とした「世界の鳥の分類和名」と用語の統一を目的とした「鳥学用語集」の学会誌への掲載がある。前者は雑報の中で、第 29 巻（1980 年）から第 34 巻（1986 年）にかけて、ダチョウ目からカモ目まで 5 回に分けて掲載されたが、その後は掲載されていない。後者は鳥類学用語編集委員会を立ち上げ、学術用語を各分野ごとにとりまとめて発表したもので、第 45 巻（1996 年）からはじまり、46 巻までに 4 回発表された。この時期はまた、学会誌にとって大きな変革があった。学会誌の名称が第 35 巻（1987 年）から和文タイトルがそれまでの「鳥」から「日本鳥学会誌」に、英文タイトルが「Tori」から「Japanese Journal of Ornithology」に改称されたことである。これに伴って、誌面も一新され、表紙からは絵が消え文字のみとなり、目次も表紙の裏に和文表記、裏表紙に英文表記がそれぞれ独立して作成されるようになる。また、英語の論文は第 35 巻から 46 巻までの全論文の 45.1% を占め、和文論文にも英文抄録が併記されるようになる。この時期から海外へ向けての情報発信を強く意識した誌面構成、体裁になったと考えられる。特集号としては、第 25 巻、第 99 号（1976 年）に内田清之助・清棲幸保両博士追悼号、第 25 巻、第 100 号（1976 年）に日本鳥学会誌「鳥」100 号発刊記念号、第 27 巻（第 4 号）（1978 年）黒田長禮博士追悼号がそれぞれ組まれている。

和英混合誌から和英分離誌の時代〔47 巻、1998 年（平成 10 年）～60 巻、2011 年（平成 23 年）〕

この 14 年間に 54 冊が発行されている。この時期の本の大きさは第 47 巻（1998 年）から第 48 巻（2000 年）までは B5 判で左綴じ、文章は横書き 1 段組み、第 49 巻（2000–2001 年）と第 50 巻（2001 年）は B5 判で左綴じ、文章は論文が横書き 2 段組みで、資料、書評などは横書き 1 段組みとなっている。表紙は第 47–50 巻（1998–2001 年）までは第 35 巻からのスタイルと変わらないが、2002 年に学会誌は和文誌と英文誌とに分離され、それぞれが独立して年 2 回の発行となる。大きさは両誌とも A4 判でコート紙を使用していることは同じだが、体裁、内容はそれぞれにこれまでとは異なるスタイルをとっている。和英分離前までの第 47 巻から第 50 巻までは 16 冊が発行され、ボ

リュームは最も薄いもので 32 ページ、厚いもので 126 ページ、平均約 63 ページである。英文誌は 2002 年 1 月に Vol. 1 No. 1 が発行され、その後 2011 年までに年 2 回、19 冊が発行された。ボリュームは最も薄いもので 52 ページ、厚いもので 148 ページ、平均約 87 ページである。表紙は白と緑色の地に国際標準逐次刊行物番号（ISSN）と誌名である「ORNITHOLOGICAL SCIENCE」、巻号、出版年と月、出版者「The Ornithological Society of Japan」の文字のみのいたってシンプルなデザインで構成されている。誌面は、Original Articles, Reviews, Short Communications, Technical Notes, Comments 等で構成されているが、巻末に同時期の和文誌に掲載された論文の英文抄録が掲載されていて、日本鳥学会で発表された日本語の論文も日本語を解さない外国人に向けての配慮がとられている。英文誌 Vol. 1（2002）から Vol. 10（2011）までに Special feature は 10 本生まれ、それに関連する論文は 74 編、そのほか Original Articles 79 編、Short Communications 47 編、Technical Notes 3 編、Comments 2 編が掲載されている。和文誌はそれまでの学会誌を引き継ぐかたちで 2002 年 5 月に Vol. 51 No. 1 が発行され、その後 2011 年までに英文誌同様年 2 回、19 冊が発行されている。ボリュームは最も薄いもので 35 ページ、厚いもので 158 ページ、平均約 97 ページである。表紙は灰色の地に国際標準逐次刊行物番号（ISSN）と和文誌名「日本鳥学会誌」と英語誌名「Japanese Journal of Ornithology」、巻号、出版年と月、出版者名の和文・英文の両表記で構成され、表紙には、第 57 巻第 1 号と第 60 巻第 1 号を除いて、掲載論文に関係する鳥のカラー写真が掲載されている。誌面は、特集、総説、原著論文、短報、観察記録、技術報告、意見、フォーラム、日本産鳥類記録リスト、鳥学用語集、学会記事、書評、紙碑等で構成されているが、巻末に英文誌 Ornithological Science 掲載論文の和文要旨が掲載されている。和文誌 Vol. 51（2002）から Vol. 60（2011）までには特集 6 本、総説 20 編、原著論文 49 編、短報 44 編、観察記録 49 編、技術報告 3 編、意見 2 編が掲載されている。なお、前期から継続して発表されてきた鳥学用語集は第 52 巻第 1 号第 7 回をもって終了している。近年ではインターネットを利用した情報の発信・収集が盛んになっており、日本鳥学会についてもさまざまな情報を学会ホームページから得ることができる。しかし、学会誌において、特に和文誌は日本語の論文を発表するという目的のほかに、紙を媒体と

した会員への事務局や各種委員会からの報告や連絡の伝達手段として大きな役割を担っているといえる。

注 1)

発行冊数は和文誌第 60 巻第 1 号 2011 年，英文誌第 10 巻第 1 号 2011 年まで，論文数は第 1 巻から第 50 巻（2002 年）までは総目次（第 51 巻 Suppl., 2002）によった。

注 2)

この号は，当時会頭であった黒田長禮博士の永年にわ

たる日本鳥学への貢献と，蜂須賀賞第一回の受賞を記念して発行された（蜂須賀 1949）。

参考文献

蜂須賀正氏(1949)黒田長禮博士記念特別寄稿. 鳥 **12**(59): 195.

編集者〔池田真次郎〕(1970)編集後記. 鳥 **20**(88): 72.
永澤六郎(1915)日本鳥学会発行「鳥」第一号. 動物学雑誌 **27**(320): 362-363.

高島春雄(1948)本号表紙の解. 鳥 **12**(57): 110-111.